

これらの宸翰をそれ／＼コロタイプ版に附し奉つたのであるが、いづれも原寸或は原寸に近き大きさを保ち寫眞撮影並びに印刷に當つた便利堂の優秀なる技術と相俟つて、御筆蹟の御神蹟を傳へ奉るのに、些かの間然する所もない。而して言ふまでもなく、これらの宸翰は年時を明記し給はぬものが多いが、別冊として添附せられた解説は、夫々に明快なる年時及び内容の考證論究をなし、是亦本集が後醍醐天皇宸翰の研究に於いて規準的な地位を占める所以をなしてゐる。更に収録の圖版の首めには、大徳寺藏の御眞影を置き奉り、天皇の英邁の御姿を偲び奉るよすがとなしてゐる。

我々は本集に接して、後醍醐天皇の御宏業を欽慕し奉り、その勝れさせ給へる御筆蹟の研究に志す者にとつて、永く憑據となるべき意義深きものであることを知ると共に、事に當られた諸氏に滿腔の敬意を表するものである。(長二尺一寸豎一尺六寸、圖版十七葉、東京國民精神文化研究所發行、定價十二圓普及版七圓の豫定)〔時野谷〕

歴史地理の研究

魚澄惣五郎 著

(内容目次)

(所要頁數)

- 第一、日本歴史地理と古代村落 (三二頁)
- 第二、河内、和泉、攝津、三國に於ける氏神鎮座地に關する研究 (八〇頁)

- 第三、風土記に現れた地名 (一三頁)
 - 第四、峠について (一三頁)
 - 第五、郷土史研究と社寺 (三七頁)
 - 第六、歴史より見たる但馬國山川の流域 (一六頁)
 - 第七、室町時代における丹波地方 (一二頁)
 - 第八、丹波久下氏と久下谷 (八頁)
 - 第九、山名、赤松、細川、三氏の隆替 (四一頁)
 - 第一〇、大楠公の本據地とその地理的環境 (二一頁)
 - 第一一、大阪城の回顧 (二六頁)
 - 第一二、大阪市鎮座の神社 (二四頁)
 - 第一三、中世の大阪 (二〇頁)
 - 第一四、歴史より見たる布施附近 (九頁)
 - 第一五、資嚴寺院造立の流行と開墾田 (一一頁)
 - 第一六、吉野川上流の古刹運川寺 (二〇頁)
- 本書「歴史地理の研究」は、著者魚澄惣五郎氏が最近數年間に起稿された論文、十六編を今回一冊にまとめて上梓されたものである。
- 同種の研究領域に屬する數編の論攷を集め或は日本經濟史の研究と稱し、或は又日本思想史の研究と題する著者を世に送る事は、我國出版界の一ツの風として、我々が屢々經驗する所であるが、本書も亦かうした形式の下に既成の論文を編纂出版したものであると思はれる。
- 従つて此の點は本書の最も著しい特色であつて、その内容も

我々が題名の「歴史地理の研究」なる概念から直ちに豫想し得るものとは、必しも一致してはゐない。例へば、室町時代に於ける山名、赤松、細川、三氏の興起、勢力の消長、應仁の亂を中心とする彼等の關係等を詳細に概説してゐる第九編や、奈良朝に於ける朝廷の墾田政策が、寺院造立の流行及びその經濟的維持に重要な原因の存する事を力説してゐる第一五編などは（若くは大安寺以下の尠大な寺田を、明かに新開墾田と考へる事によつて、論據の一つとしてあげてゐるが、是等の墾田の大多數が、實は未墾の荒地である事は多くの史料の示す所であり、而もかゝる墾田の多くが不輸租の特權を保持した事考へるならば、著者の決論には尙十分に吟味すべき點が含まれてゐると思はれる。）縦ひそれ等が多少とも土地との聯關に於て述べられてゐるにしても、我々はこれをそれ（政治史或は經濟史的研究と呼ぶ事に、より多くの妥當性を感じざるを得ない。

此の様な編纂體制上の矛盾は、第一に讀者の目に觸れる難點ではあるが、併し寧ろ本書の特色を言ふならばその記述の總てが著者の居住せられる阪神地方を中心とした地域に關するものである事であらう。著者も自ら序文に於て「各編中にある地名の多くは、尠くとも一度は私が實地に踏査したもので、著者にとつては深い印象を受けたところ、たゞ書齋裡から覗いた考察でないことを誇りいたします」と述べてゐる如く、著者が多年近畿地方を東奔西走せられる間に、實際に接し得た土地、文書、記録等を地盤として成立した努力の成果が即本書である。

特に第二編は、文部省精神科學研究費の補助によつて成つた

八〇頁に亘る力作であるが、此處に於ては攝、河、泉、三地方に於ける氏神鎮座地とその地理的環境との關係を、延喜式神名帳所載のもの六十六社に就いて實證的に考察し、究極に於てそれが同地方に於る古代聚落の遺跡に一致するものであるとする結論を導き、更にはそれ等各神社に關する詳細な説明が末尾に附け加へられてゐる。

これは著者の企圖する所謂「歴史地理學」的研究でもあらうが、同時に亦それは尋常の呼びならわしに従つて、郷土史的研究とも言ひ得るであらう。

而して大阪城の興亡を手際よく概説してゐる第一一、大阪市内鎮座の諸神社から同地方の古文化に言及してゐる第一二、又正平の書寫と言はれる大般若經の奥書を紹介して、その史料的重要性を述べてゐる第一六、及び第十五編の如きに至つては、更に強く此の様な傾向を看取する事が出来る。

従つて著者は第五編に於て、歴史上の社寺が、政治、經濟、交通、信仰等の諸文化事象に見る如く、如何に地方文化と密接な關聯を持ち、又地方文化の中心として活躍したかを究明せられ、更に進んで、それが郷土史研究及び、ひいては歴史一般の研究に重要な意味を持つものである事を述べられてゐる。是れは郷土史研究一般論とも言ふべきものであらう。

けれども一體此の様な郷土史的研究が如何にして所謂「歴史地理學」たり得るのであらうか。

著者は第一編に於て、「日本歴史地理とは」と方法的に先づ自

問せられつゝも、「こゝに日本歴史地理と題するのは、古來わが國の人文地理がどんな風に變遷して今日われ／＼の目撃する様な状態となつたかといふことを考究しようとするのであつて、地理上の考察から國史の研究を助けてこれを明かにしたいといふ意味である」と極めて曖昧にして陳腐な解答を我々に與へたのみで、「特殊地理學としての歴史地理學、ひいては日本歴史地理學の意義及びその方法等については論議すべき點は多々あるであらう」が「しかしそれらについては他日を期して」居られるのである。終つて本書に於ては、歴史地理學に關する方法的反省は一應多く問題とせられてゐない如くである。それに關らず、他の個所に於ては、「土地の物理的變遷を考へ」る事

又「河川水路の變遷や海岸線の變動などを考察」すべき事等をあげ、要するに日本歴史地理はわが國文化發展の過程をその地理的環境を通じて考察し地と人との關係においての地域的認識を明かにするものでなければならぬ」と明確な結論を掲げてゐるのである。

歴史地理なる學問は、その曖昧なる概念の故に、未だ怪物なる域を脱し得ない事は確かである。併しそれにしても最近、小牧氏、綿貫氏以下地理學者からの意見の提出があつて、方法には一應體系的な反省が試られつゝある現今の狀態を考へるならば、著者の此の様な意見の提出は、何等學問を進展せしむるものではない。かへつてかゝる古き地人相關論は、曾て雜誌「歴史地理」發刊當時、星野恒、久米邦武、田中義成等、先學諸氏

によつて論せられた歴史の地理的研究、といふ、古典的命題に逆行するものと言はざるを得ないであらう。

とにかく、著者は歴史地理學なる概念に種々雑多な課題を附加してはゐるが、要するにその根底に在つて方法論を支持してゐるものは、所謂地人相關の二元論であるらしい。

實際此の事は、特に第六編の但馬關山川流域に於ける古代文化論、又中世に於て丹波地方が歴史の進展に重要な役割を果した事、及び、從來氷上郡志によつて多少世に知られてゐた豪族久下氏の消長を詳説してゐる第七第八等の諸編に於て、一層具體的に感ぜられる傾向である。或は更に言ふならば、それは寧ろ地理的環境であるとも考へられるのである。

以上は所收諸編の主なるものに關する簡単な紹介に過ぎないが、要するに著者が單行本として世に問ふべき本書の意義は、論文集成としての題名の如き一貫した主張にあるのではなく、寧ろ多年の努力によつて得た詳細な史料と、その豊富な利用價值にあるであらう。

尙第三、第四は輕い小編であるが、第一編後半は、大和、河内、攝津方面に於ける石器時代遺跡の地理的位置から、古代聚落の形態及びそれとの關係に論及したものであり、又、第一〇編は吉野朝時代に於ける楠氏の勢力の背景となつた石川源氏、及びその本據たる南河内地方の地理的環境との關係を論じたものであつて、その論據には頗る興味深いものがある。(菊版、京都、星野書店發行、二・五圓、三三八頁)〔内藤〕